世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

A Report on Exhibition and Workshop in ECHIGO-TSUMARI ART TRIENNIAL : "ARCH FOREST 2009"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-12-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水谷, 俊博 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/328

大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2009 出展における活動報告
—出展作品名「アーチの森2009」—

A REPORT ON EXHIBITION AND WORKSHOP IN ECHIGO-TSUMARI ART TRIENNIAL
— "ARCH FOREST 2009" —

水　谷　俊　博*
Toshihiro Mizutani

1．はじめに

新潟県の越後妻有地域広域２市町（十日町市、津南町）の里山を舞台として、2000年夏より開催されている、「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」。国内有数の豪雪地帯にあげられるこの地域において、地域に内在するさまざまな要素をアートを媒介として掘り起こし、地域再生への道筋を築いていくことを目的とした３年に一度の世界最大の国際芸術祭である。芸術祭における作品は、全世界の著名アーティストの招聘及び、公募による入選作品により構成されており、2009年はその４回目を迎えた。芸術祭は世界的にも著名なアーティストの作品が出展されることにより、広く世界的に関心を集めている芸術祭典であり、学生のデザインの実践的な教育という面からも非常に有意義なプロジェクトと位置付けた。

2008年度6月に大地の芸術祭実行委員会主催による、作品プロポーザルコンペティション「第２期大地の芸術祭・越後妻有トリエンナーレ『里山を舞台とする作品』」において、武蔵野大学水谷俊博研究室が応募をした作品『アーチの森2009』が入選を果たし、2009年のトリエンナーレ芸術祭に出展することとなった。プロジェクトは、大学の卒業研究、環境プロジェクト特別演習、環境論演習の授業の発展的成果の発表の場とし、合計35名の学生が参画し、展開した。

本稿においてはこの大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2009における作品概要、及び企画、設計から施工、会場における作品展示の運営までを含めた経緯及び、活動の報告をおこなう。

2．計画案の概要

本章では、プロポーザル提出時から、実際に制作をおこなうまでの間に検討をかさねた案に関して、時間軸に沿って概要のトレースをおこなう。

＊准教授

2.1. 計画案１：プロポーザル提案

プロポーザル時の提案は、里山の池谷集落地域に、木材で構成したアーチ状の構造物を連続させて自然の木と人工的な木に包まれるような空間をつくり、そこを通る来場者がさまざまな里山の歴史、情報、記憶、環境を体感できるような場所づくりをおこなうというものであった（図１）。集落の人々の参加のもと、木造アーチの制作をおこない、そのアーチを骨格に、交流や文化発信、学びなどのアクティビティのコンテンツを包含した空間をつくってゆくという提案である。

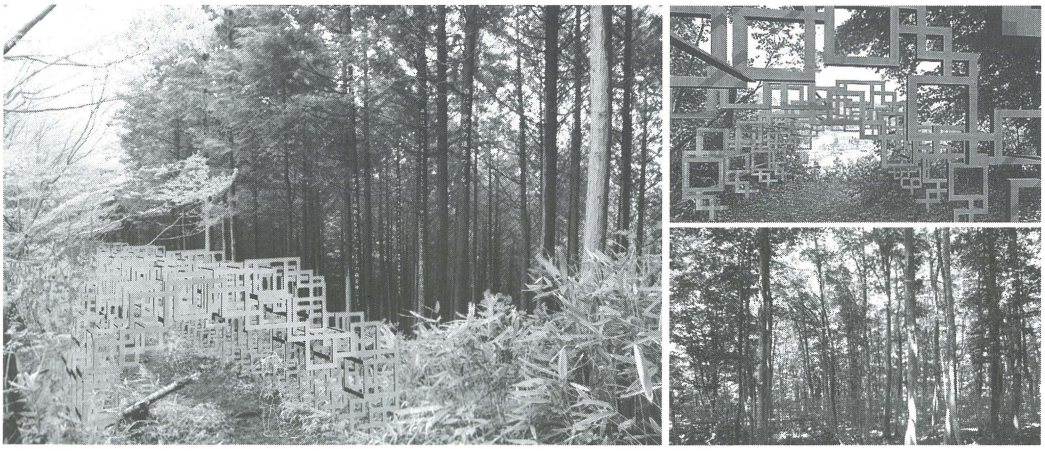


図１　池谷集落地域の『アーチの森』のイメージ（プロポーザル提案）

作品の大きなテーマは以下の3点である。

① 誰でも木造構造物をつくる工程に参加できること

② 継続的に成長していくこと

③ 成長の過程で来場者がさまざまなフェーズで交流ができること

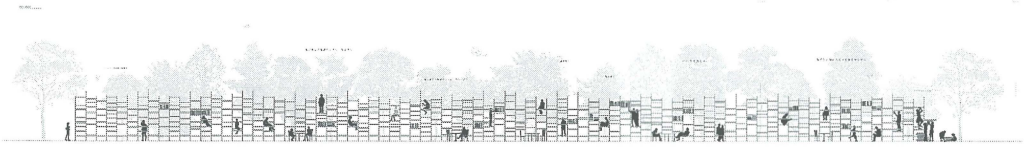


図２　『アーチの森』の断面イメージ（プロポーザル提案）

使用材はワンバイフォー（１×４）のSPF材。低コストでどこでも手に入るものを採用。施工はセルフビルドでおこなうことはもちろん、誰でも組み立てることのできるシンプルな工法でつくることを目的とした。材を加工し、落とし込みの要領で十字型の木の部材が組めるようにする。それらを組み合わせて１ｍ×１ｍの正方形から腕を伸ばしたような形態の９つの種類のパーツをつくりだす（図3.1～3）。正方形から突出する材はパーツの接合部と同様に落とし込みの要領で、他のパーツと連結できるようになっている。それらの９種類のパーツを連結することにより、高さ3200mm～4000mm、幅6700mmの５種類のアーチユニットをつくり、さらに、高さレベルが一致するポイントで梁部材をかけ、木のアーチが連続する木造構造物（図２）の提案であった。

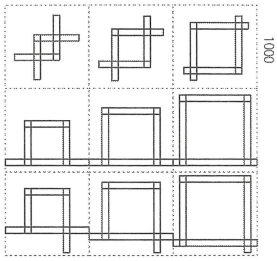
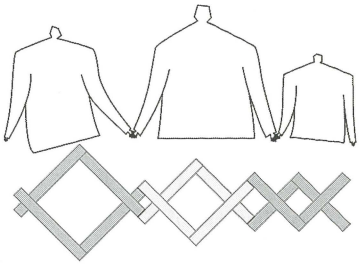


図3-1　9種類の正方形パーツ：パーツ同士が連結する。



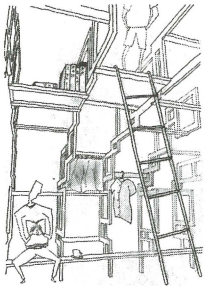


図3-2　イメージスケッチ
図3-3　部材の組み立て構成図（右）

このプロジェクトは「みんなが集まってつくる」ということをメインコンセプトとして考え、来場者の方と共に構造物の増築をおこない、会期中変容していくワークショッププログラムを提案した。それにより来場者の方々の記憶が沁みこんだ構造物が徐々に形成されていき、さまざまな人々の出会いを生む場所となることを期待した。

2.2. 計画案２：修正案

2008年９月30日に大地の芸術祭事務局（以下、事務局）と第１回目の面談。芸術祭ディレクターの北川フラム氏より作品入選の連絡を受ける。その後、提案プロジェクトの具体的な方向性について両者のすり合わせをおこなう。その結果、作品の設置場所を提案の集落から変更し、新潟県十日町市越後妻有交流館キナーレ（設計：原広司氏）に決定する。それに伴い、設計の条件も下のように定まった。

・キナーレの会場全体の空間演出をおこなう。
・施設内の回廊に各アーティストの作品を展示する。
・キナーレ中央の大きな池を活発に活用する。
・カフェ・ギャラリーなどさまざまなアクティビティが可能なソフト展開を視野に入れる。
・たくさんの人が関わり、出会う場所として提供する。
・小学生とのワークショップなど「参加型」の手法を検討する。

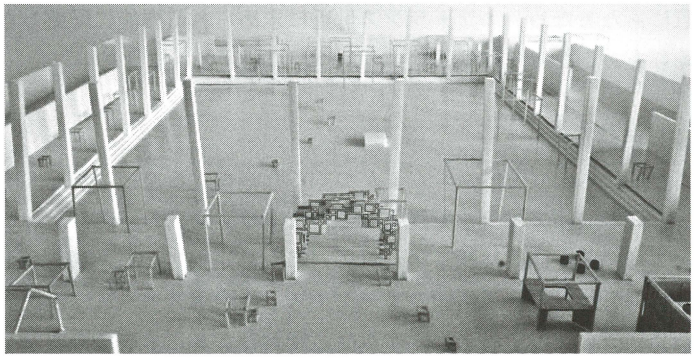


図４　計画案２：会場全体のイメージ（模型）

プロジェクト・コンセプトは従前からの考え方をふまえ、十日町の越後妻有交流館キナーレに、木でつくったアーチを会場全体に配して、芸術祭に訪れた人々がさまざまなかたちで楽しんだり、憩ったりできるような場所づくりをおこなうこととした。さらに、大地の芸術祭の中核施設として「キナーレ」のさらなる活性化を目指すことも念頭においた。

アーチの基本ユニットをシンプルな立方体ユニットに変更。ユニットをシンプルにすることによりさまざまな展示スペースに対応できる空間構成が可能となった。これらのアーチが集合体となり、会場に展示される作品の展示スペース、インフォメーション・ステーション、カフェ、憩いのスペース、などとして機能し、キナーレの会場全体を演出する（図4、5）。

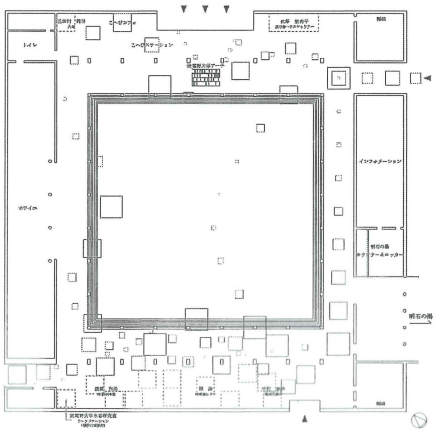


図５　計画案２：会場全体平面図

〈計画の考え方〉

○会場全体の一体感を創出
　・施設内で自然を感じる木の空間づくり。
　・アーチで会場全体を結びつける。
　・普段とは違ったキナーレの姿を実現。
○来場者が交流できるさまざまな場所づくり
　・アーティスト作品展示スペース
　・インフォメーション＆カフェ
　・さまざまな憩いのスペース
○来場者が交流できるプログラムの展開
　・芸術祭の情報発信
　・展示作品の紹介
　・アートワークショップ

全体平面配置は、木のアーチにより疎、密の空間をつくることにより、場所ごとの特性をあたえながら一体的な空間づくりをする考え方に基づく。

2.2.1. メインエントランス（北側）

施設北側の出入口を主要出入口と考え、施設全体のゲートとしての役割を果たし、ゆとりのある展示空間を考えた。北西コーナーにカフェとインフォメーションを設置。入場後最初に施設全体を見渡せる位置にあたるため、エントランス付近に求められる機能に配慮しながら会場全体と連続した空間づくりをおこなっている。

2.2.2. 回廊部（東、西側）

施設の東西の通路部は木の立方体ユニットがつくる回廊を巡る連続した空間を考えた。大小さまざまなヴォリュームの立体アーチを配置することにより、回廊の各部にテーマ性を持たせた空間づくりをおこなっている。回廊は幅も限られているため来場者の基本動線部は通路幅有効３ｍを確保。来場者の動線を誘い、施設南側のアーティストの展示スペースへの導入の役割も果たすことに配慮した。アーチを池の中にも配置するなど施設のさまざまな建築要素との関係性をもたせている。

2.2.3. 展示スペース（南側）

施設南側に各アーティストの展示空間ゾーンを設ける。さまざまなアーティストの展示内容に対応できるシンプルな構成とフレキシビリティを持たせることを大切に考えた。1アーティストについて3m×3m×3mのアーチユニット2個分の展示フレームを用意する。小壁や小梁が設置できるようにし、さまざまな展示手法に対応できるようになっている。また、ユニット間の隙間のスペースを展示に活用できることも可能である（図6）。

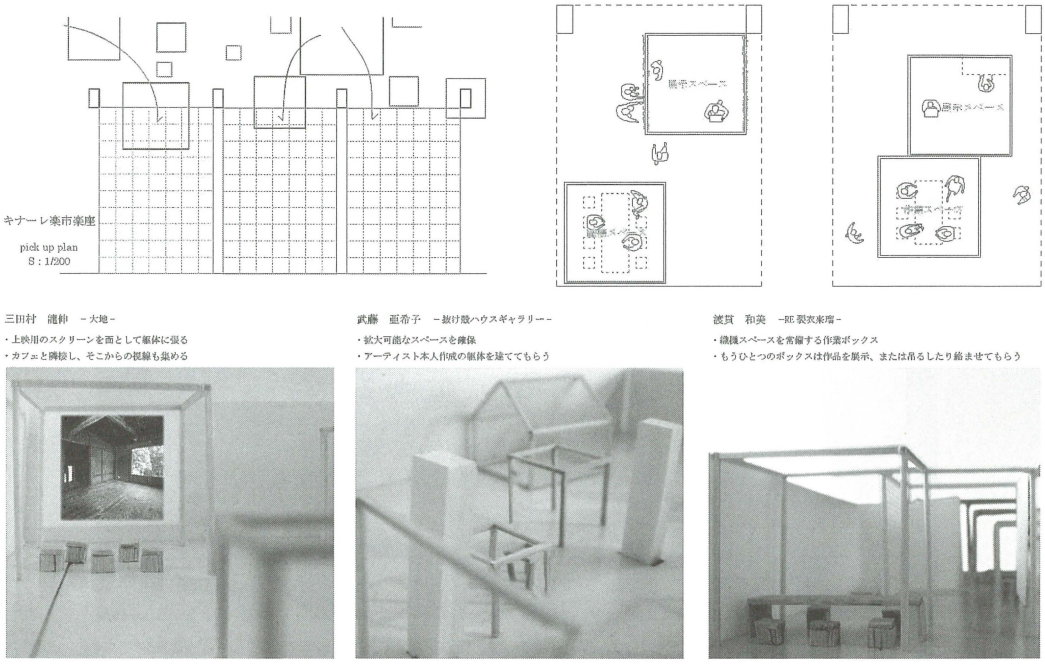


図6　計画案2：展示スペースの考え方

2.3　計画案3：最終決定案

2009年4月27日に第2案の提案に関して事務局より追加の要望があり案の修正検討をおこなう。指摘は以下のポイントであった。

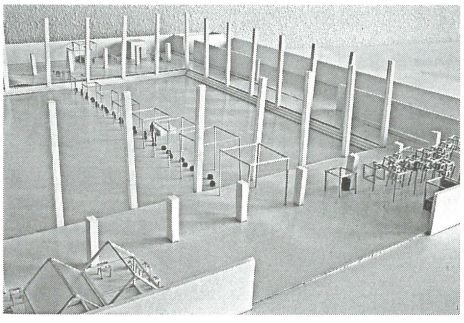


図7　実施最終案のイメージ（模型）

- アーチユニットが多く人の動線に影響があるため整理する。
- 回廊部分にユニットの設置が難しい。
- ワークショップをおこなう所とその他の所に境界を作りたい。
- プロポーザル時のジャングルジム風の木造構成も反映させたい。
- カフェの充実をはかりたい。
- 池の中は活用して差し支えない。

さらに2009年5月18日、6月1日、6月15日の事務局との協議により、最終の実施案が決定した（図７）。

2.3.1. アーチの森

提案の大きな特徴は池を南北にわたり、１列に立方体アーチを大胆に配置した点にある。来場者は池の中に降りて作品にふれることになる。いわば水の中の通路のような機能も果たしている。池の中で作品を体感できることにより、施設全体のポテンシャルを高めることを目的としている。また、一列に結ぶことにより施設全体の一体感を高めることも考えた。各アーチの配置は会場のキナーレの柱のスパンに対応する位置に配置をすることにより、施設との連続感を高めている（図８）。

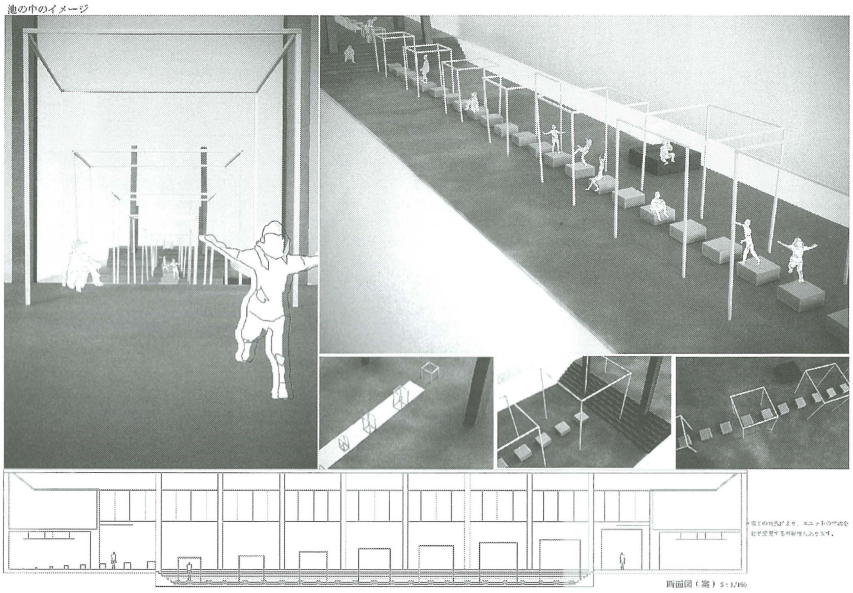


図８　アーチの森のイメージ（上）及び断面図（下）

2.3.2. こへびカフェ+こへびステーション

本プロジェクトで最も事務局から要望が強かったのはカフェ機能（名称：こへびカフェ）の充実だった。アーチの森を構成している立方体の木のフレームユニットをさまざまなスケールにおとしこみ、それを集積体として、カフェの機能とインフォメーションセンター（名称：こへびステーション）の機能を併せ持った、森のような一体的な空間づくりをめざした。立方体の木のフレームユニットを平面的、断面的にずらしながら連結することにより、来場者がさまざまなかたちで交流できる木の濃密な空間を計画した（図９）。これにより、芸術祭のポスターなどを貼るなど、芸術祭の広報的なニーズへの対応もおこなった。

また、施設の中でも憩いの場としての中心的な役割を担うことが想定された。芸術祭のツアーのスタート地点としてのガイダンススペース、打ち合わせスペースなど、十数人が一度に集まる

ときにも対応できるテーブルやスペースの設置が要求された。また基本的に交流の場所としての機能も大切である。構造体全体の中に、カウンター、テーブル、ベンチ、椅子、その他、会場内でのサインとして役割を果たす機能を各々の木の立方体フレームにもたせ、多目的かつ多機能に憩える場を提供した。

また、カフェの運営自体も武蔵野大学水谷俊博研究室がおこなうこととなった。運営期間は８月１日～30日。メニューは飲み物５，６種類とドーナツなどの手づくりの軽食を提供することでカフェの活性化も戦略的に展開していくこととなった。

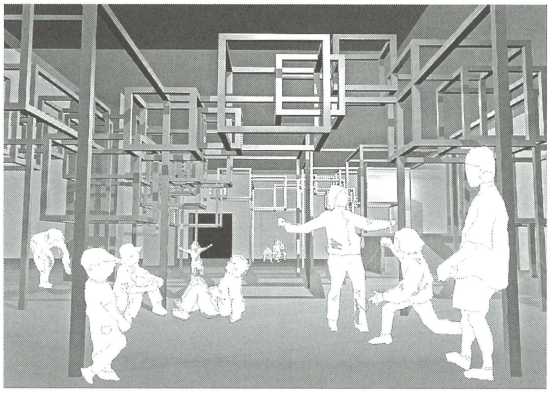


図９　こへびカフェ十こへびステーションのイメージ

2.3.3. 作品展示スペース

公募展妻有焼の展示スペースも設計、制作をおこなうことがプロジェクトに追加された。一般公募による陶芸作品約40点（最大作品寸法１m×１m×１m）の展示をするスペースづくりをおこなった。アーチの森と同様に立方体のユニットによる展示台に１作品ずつ展示をおこなうという分散配置形式の展示計画を第1案として提案をおこなったが、動線の確保及び安全性の確保という観点から、１点１ユニットではなく、いくつかユニットをかためて展示スペースを島にしていく展示方法でおこなうこととなった。

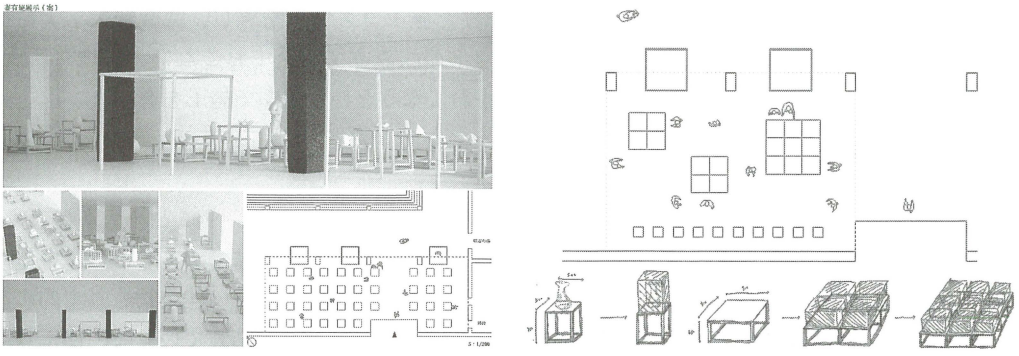


図10　妻有焼展示スペースの提案（左：第１案、右：展示ユニットを固めた展示構成）

その他、展示するアーティストが決定。ラインナップは、中村未歩「絶対交換会」、原游「時間差レター２」、武藤亜希子「無くしものテント」、三田村龍伸「大地」、渡貫和美「RE裂衣来瑠」。展示に必要な供給ユニットは、随時各アーティストとの協議をおこない決定された。また、瀬戸内国際芸術祭、新潟水と土の芸術祭の宣伝ができるような展示ブースも追加で要望があった。基本寸法1900mm角のユニットに壁、カウンターを設置し、展示ブースを製作。カフェ近くに設置した。

2.3.4. 家具のデザイン

こへびカフェやこへびステーションなどの憩いのスペース及び、各アーティストの展示ブースに必要な家具のデザインをおこなった。これもアーチの森と同様のデザインモチーフを採用。木の立方体フレームを200mm×200mm×200mmを最小寸法とし基本的に50mmごとにサイズを上げていき、最大700mm×700mm×700mmまでの計8種類のユニットで家具を製作した。小さなものは子供用の椅子となり、大きなものはテーブルとして機能。さまざまなシーンでさまざまなかたちで使用できる家具の計画とした。

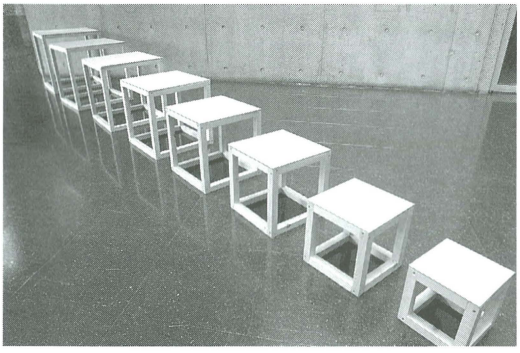


写真1-1、1-2　家具ユニットの試作品

3．施工過程の概要

施工は完全なセルフビルドでおこなった。施工性と施工コストに配慮し、武蔵野大学実習棟（東京）で、材の切り出し、加工、部分的なユニットの組み立てを全ておこない、現地（新潟）で搬入した材、及びユニット同士の組み立て作業をおこなうという手順で施工を進めた。

3-1. ユニットの場内施工（プレファブ）

本プロジェクトの基本的な考え方は、「みんなが集まってつくる」ということを大切に考え、のこぎりさえあれば誰でも組み立てることが出来るというシンプルな工法でつくりあげている点が特徴である。最も構成が複雑な「こへびカフェ＋こへびステーション」の建築物も基本的にはどこでも手に入れることのできるマツの角材を垂直方向と水平方向に連結していくことにより全体の構造を形成している。

施工にあたっては、材の接合部をシンプルに見せるということと、接合金具が見えないように組み手のディテールに工夫をしている。ディテールは大きく分けて２種類の継ぎ手を考えた。メインの作品である「アーチの森」に関しては、接合部の簡潔にすることに最も注意をはらった。鉛直方向、水平方向の材の勝ち負けをできるだけ現わさないように３方向からの材を受け止める継ぎ手のかたちとした（図11）。４ｍ×４ｍ×４ｍの巨大アーチから、4.5cm×4.5cm×4.5cmの手のひらサイズのアーチまで計17個のユニットを制作した。また、「こへびカフェ＋こへびステーション」に関しては、マツ材でさまざまな大きさの立方体フレームを形成し、接合部を落とし込みの要領により、平面的、断面的に組み重ねて全体を構成した（図12）。構造強度と施工性に配慮した接合部の構造となっている。

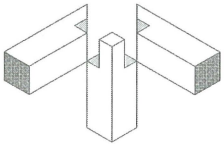


図11　「アーチの森」立方体ユニットの接合部

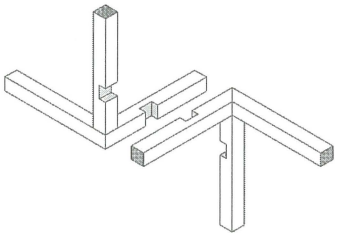


図12　「こへびカフェ＋こへびステーション」の構造部材の接合部

3-2. 現場施工

現地のキナーレでは、「アーチの森」をかたちづくる立方体ユニットの組み立てと、東京で製作をおこなった「こへびカフェ＋こへびステーション」の部分ユニットの連結施工をおこなった。

「アーチの森」の立方体ユニットは完全に現場施工のため、プレカットした部材を現地で組み立てる。施工誤差を出さないよう慎重に組み立て作業をおこない、ユニットが製作されると順次設置場所にセッティングをおこなった。

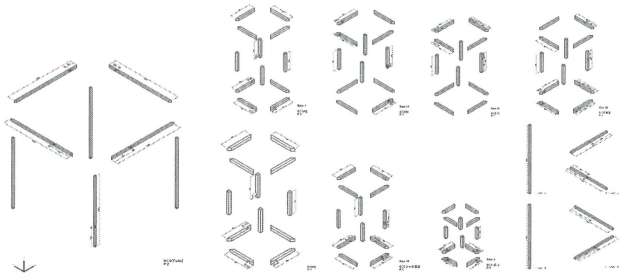


図13　ユニットの施工図

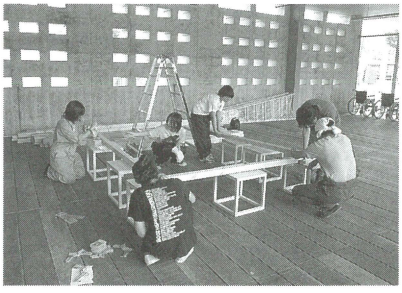


写真２　「アーチの森」の立方体ユニット施工の様子

「こへびカフェ＋こへびステーション」の組み立ては、東京で製作したユニット部分同士の組み立てのため、部材の設置手順を含めて設置箇所を間違えないように施工図とユニットに記され

たナンバリングを照合しながら施工をおこなう。高所での作業が発生することと、現地施設における既存部分との取り合いの問題を解消しながら、施工作業を進めていった。

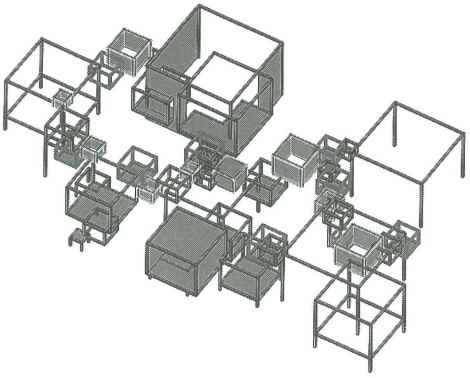


図14　「こへびカフェ十こへびステーション」の躯体の構成図

写真３　カフェ組み立て作業の様子

４．完成作品の概要

本プロジェクトは、十日町市越後妻有交流館キナーレに作品『アーチの森2009』を設置すると同時に、展示施設としてのキナーレ全体の空間演出を行う点が大きな特徴である。施設の中央に『アーチの森2009』を設置し、このアーチと同じデザインモチーフを用いて会場全体を演出した。作家のための展示空間、「こへびカフェ十こへびステーション」などにデザインの連続性をもたせて、施設内の回遊性を高めている。

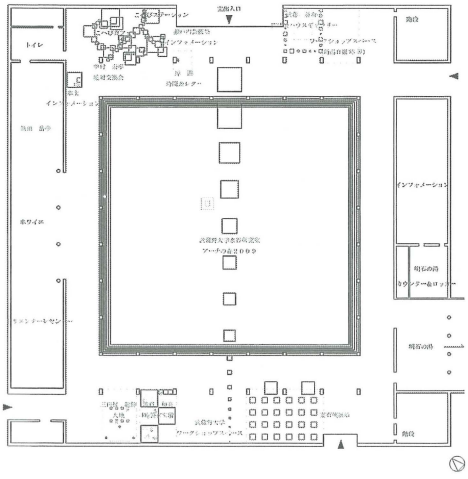


図15　全体配置平面図

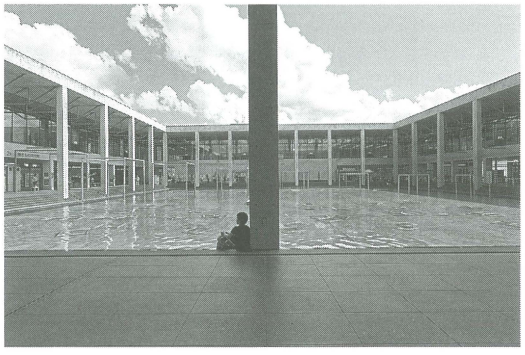


写真４　キナーレの展示全景

4.1　アーチの森2009

木造仮設建築物によるインスタレーション作品。施設中央に自然の風景になぞらえた木の立方体フレーム群による「アーチの森」を設置し、池を横断する大胆な回廊を創出した。施工は完全なセルフビルドで、巨大な４m×４m×４mのユニットから、手のひらサイズの4.5cm×4.5cm×4.5cmのアーチまで、計17個のユニットにより形成されている。

施設内の一体感を高めて数々の展示空間をつなぎ、池はワークショップの場としても活用し、来場者の足跡を作品の一部として残した。

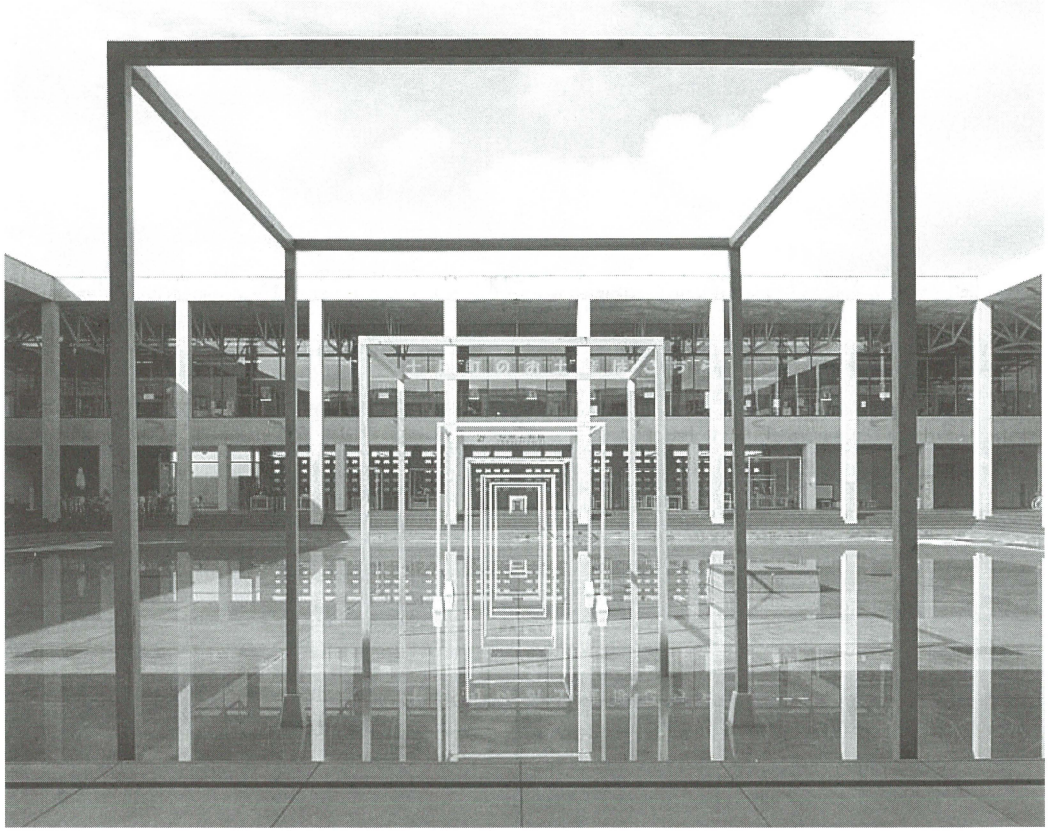


写真５　「アーチの森」全景

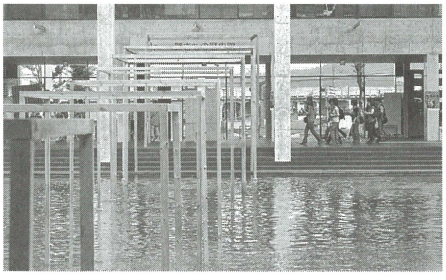


写真６　来場者と「アーチの森」の風景

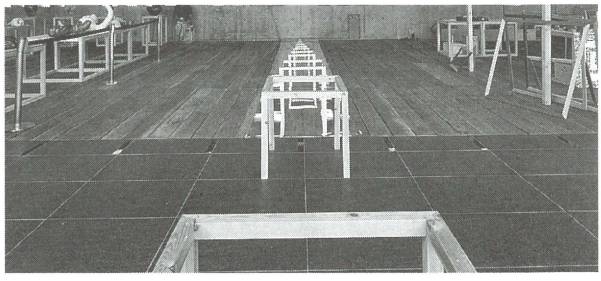


写真７　小さなアーチ群

4.2　こへびカフェ十こへびステーション

4.2.1　建築概要

「こへびカフェ十こへびステーション」も『アーチの森2009』のデザインモチーフと同様、さまざまな大きさの松材で形成された立方体フレームが平面的、断面的に組み重なることにより、小さな木からつくられていく大きな森のような空間を創出している。この森のような空間の下で、人々は喫茶を楽しみながら、集まり、憩えるスペースとなっている。

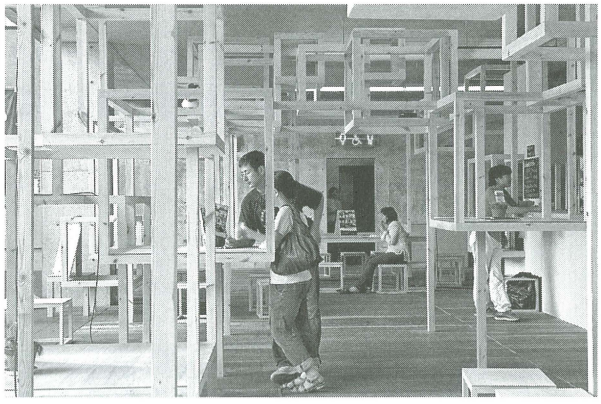


写真10　カウンターとなるユニット

写真９　テーブルやイスとなるユニット　写真11　情報発信として機能　写真12　作品展示として機能

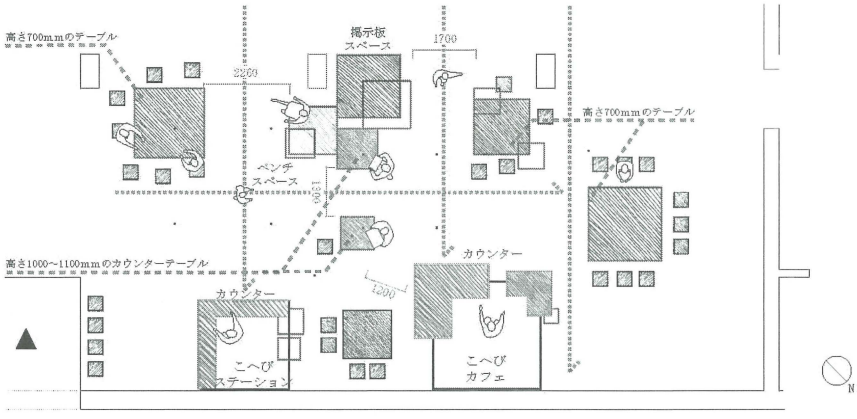


図16　「こへびカフェ十こへびステーション」平面図

木の立方体フレームは、カフェのテーブルやイス、カウンターとしての機能を果たす他、情報BOXの役割も果たし、越後妻有の紹介、芸術祭の情報発信、展示作品・アーティストの紹介、ワークショップなどの情報発信基地となった。多くの来場者が訪れて、ゆっくりと時間を過ごせる憩いの場としての役割を果たした。情報BOXのコンテンツが時の経過により変化していくのに合わせて、こへびカフェ全体の姿も日々変容していった。

□建築概要
施工面積：140.80㎡
木造軸組工法
外部仕上げ：外壁／シナベニヤ耐候性塗装、屋根／構造用合板耐候性塗装、開口部／木製建具（シナ仕上）
内部仕上げ：床／ラワン合板、一部アクリルミラー板、壁／シナベニヤオイルフィニッシュ、マツ構造材現し、天井／シナベニヤオイルフィニッシュ、マツ構造材現し

4.2.2　こへびカフェの運営

芸術祭期間中のカフェの運営も武蔵野大学水谷俊博研室がおこなった。カフェのサービスとして8/1～8/30の間「アーチの森2009やさいのお菓子カフェ」を展開。野菜を使ったオリジナルスウィーツを販売し、連日盛況で大勢の来場者の憩いの場として機能した。

4.3　各アーティスト展示ブース

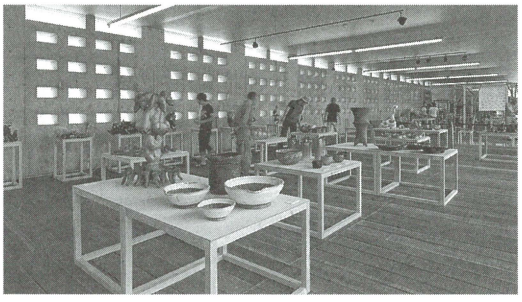


写真13　妻有焼公募展

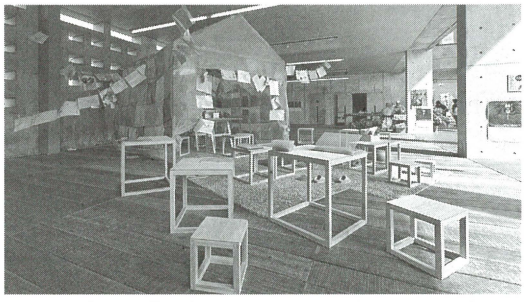


写真14　「無くしものテント」（武藤亜希子）のブース：ワークショップ

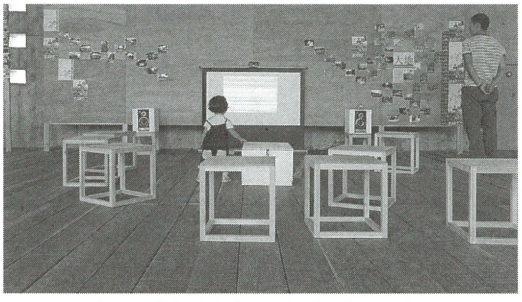


写真15　「大地」（三田村龍伸）のブース：映像

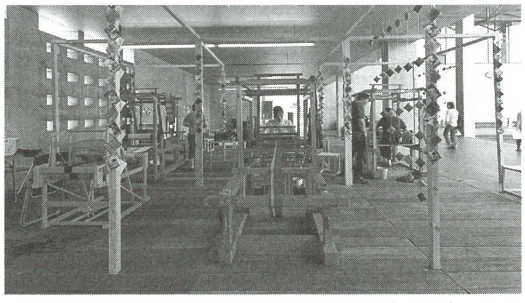


写真16　「RE裂衣来瑠」（渡貫和美）のブース：体験展示

各アーティストの展示ブースのデザインも、「アーチの森」と共通のモチーフである木の立方体ユニットにより形成した。展示ブース、作品の展示台、ワークショップ用の家具ユニット、映像鑑賞用の客席などを、ユニットのスケールを変えていくことにより構成し、展示空間づくりをおこなった。

5．アート・ワークショップの概要

会期中、作品に関連した2種のアート・ワークショップを開催。延べ1000名を超える方に参加いただき、作品（会場）全体の様子も会期を経るに従ってにぎやかに変容していき、会場全体の活性化を促進した。

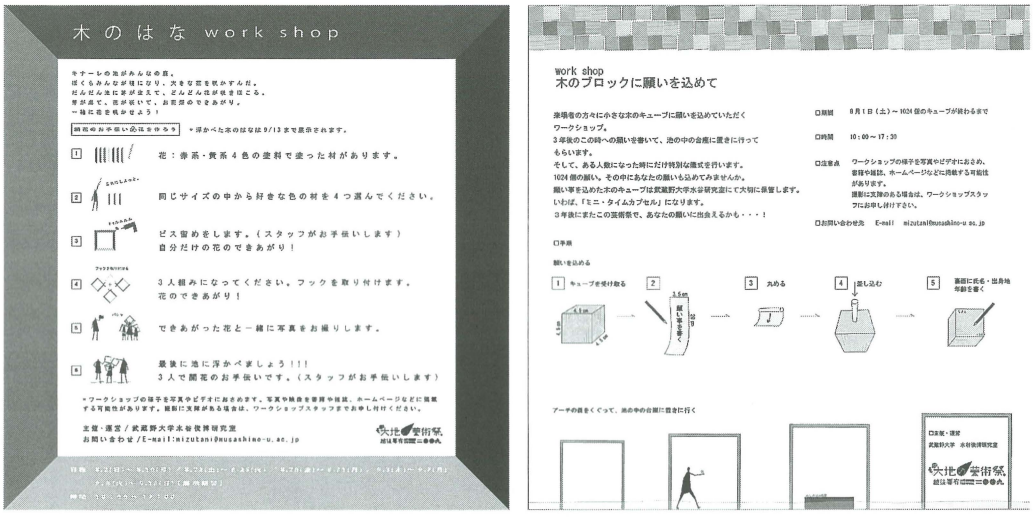


図17　ワークショップの案内ポスター

5.1　ワークショップ1：「木のはなを咲かせよう」

□会期：8/2〜8/10、8/22〜9/13

「キナーレの池がみんなの庭」というコンセプトのもと、来場者にキナーレの池に花にみたてた木の枠をうかべてもらうワークショップ。来場の足跡として「木の花」が会期中池に咲き、会場全体が華やいでいく。ワークショップのプロセスは、自分だけの「木の花」の制作、みんなで「木の花」を合体、「木の花」と記念撮影をして、最後に池の中に入ってもらい好きな場所に浮かべるというアクティビティをおこなってもらった。会期最終日には池全体に木の花が満開になった。

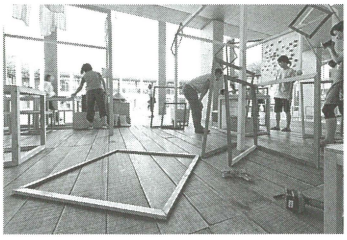


写真17　ワークショップスペース

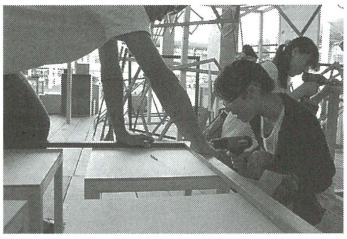


写真18　「木の花」の制作

写真19　「木の花」の合体

写真20　「木の花」を持って池の中へ入る

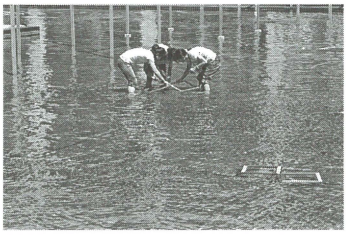


写真21　設置の様子

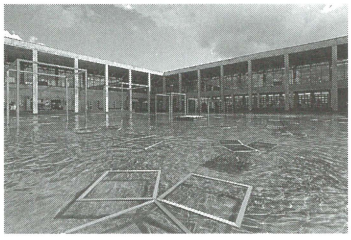


写真22　池に浮かぶ「木の花」

5.2　ワークショップ２：「木のキューブに願いを込めて」

□会期：8/1から1000個制作終了まで（8/13～8/17は休み）、(9/12に終了)

来場者に小さな木のキューブに願い事を込めていただくワークショップ。紙に書いた願い事を、丸めて木のキューブにつめ込み、つくった木のキューブを持って池の上の「アーチの森」をくぐり、池中の台座に設置してもらう。その際、オリジナルの白い衣装を身に付けて、台座まで池の中を歩くパフォーマンス（歩きの舞）をおこなってもらった。このパフォーマンスは会場全体の注目を浴び、会場の祝祭性を高める役割も果たした。

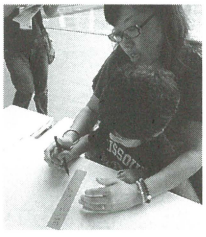


写真23　願い事を書く

写真24　木のキューブにつめる

写真25　キューブを持って池へ

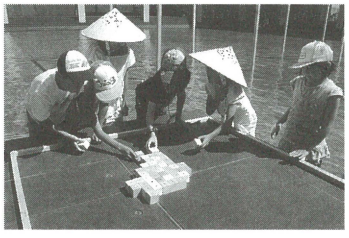


写真26-1、26-2、26-3　池中にある台座に木のキューブを並べる。会期中どんどんキューブが増えていく

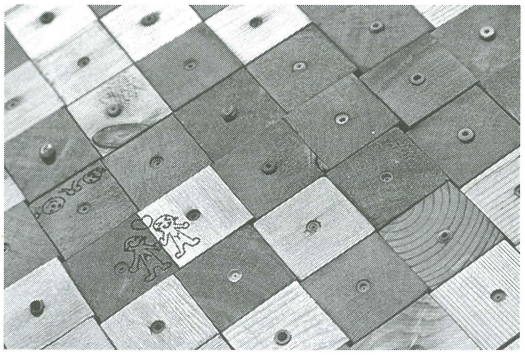


写真27　台座に置かれた木のキューブ

写真28　木のキューブと「アーチの森」の風景

アーチの森2009はキナーレの池内にあるため、アートワークショップは積極的にこの池を活用した。来場者はワークショップに参加しながら、池の中に入り「アーチの森」をくぐったり、「アーチの森」の下でたたずんだりし、会場であるキナーレの空間や雰囲気を楽しむことができる場を提供できた。たくさんの子供の遊び場として機能し、家族連れやカップルの憩いの場となった。会期中はほぼ全日、作品に関連したワークショップを開催していたため、作品（会場）全体の様子も会期を経るに従って、にぎやかに変容していった。

写真29　ワークショップ参加者の写真撮影

写真30-1、30-2　ポラロイド写真が増えていき展示スペースを彩る

6．おわりに

越後妻有における取り組みは、地域の活性化を考える上で非常に意味深い。今後のプロジェクトの課題としてあげられることは、地域の人々の参加の輪をどれだけ広げられるかということである。特に広報を含めたPRをどこまで広く、深く浸透させるかということは課題であった。ワークショップ運営にかける、多方面との交渉、事前の制作、準備の工程をいかに密に構築できるかということが重要だと思われる。今後はさらに地域の参加者の輪を広げながら、地域活性化を引き続き提案していき、地域に根ざした取り組みを図ることが大切となってくる。

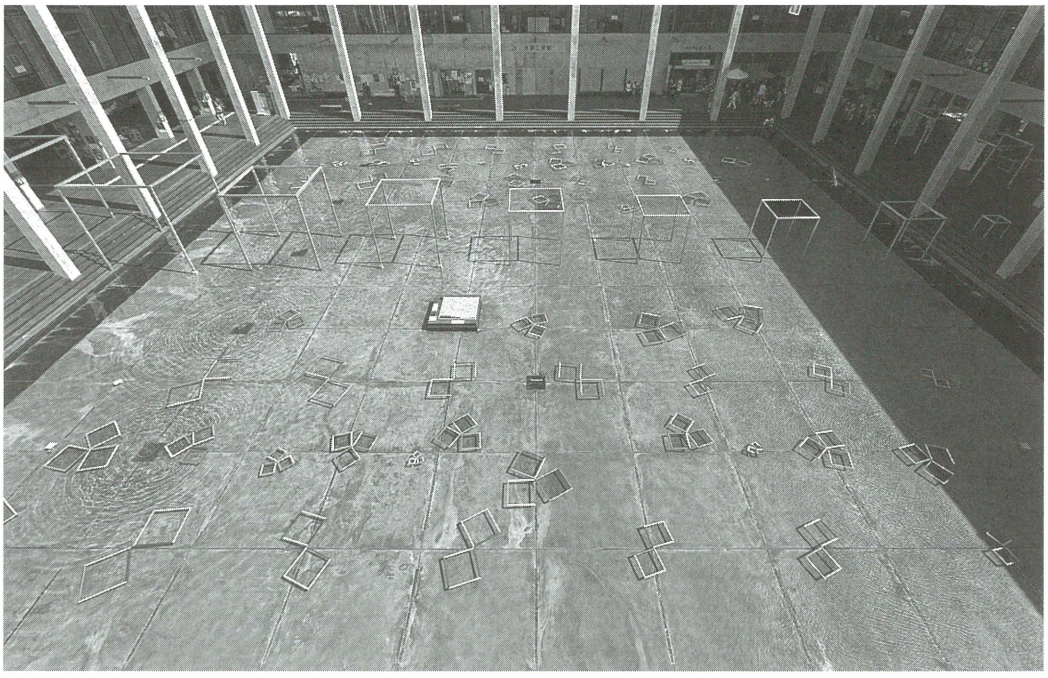


写真31　作品全景

プロジェクトに協力頂いた大地の芸術祭事務局、八箇地区振興会のみなさん、十日町越後妻有交流館キナーレ、㈱小嶋屋、㈱拓越、武蔵野大学後援会、武蔵野大学環境学部環境学科住環境専攻、など各関係者の方に感謝の意を表する。

写真撮影
淺川　敏：写真4, 6, 7, 9, 10, 11, 13, 14, 15, 16, 17, 20, 21, 22, 26-2, 27, 28, 31
中島悠二：写真5
水谷俊博（及び水谷研究室）：上記以外の全て

武蔵野大学プロジェクト参加者（卒業生含む）：
塩入　勇生、上治　良充、山中　彬充、石戸　弘子、伊東絵里奈、中井　孝伸、新井　清香、磯貝　綾乃、菅野　大地、栗田　智代、佐藤　瑠美、澤田　和寛、清水　智美、田中　葉月、中村　弥生、長坂由寿子、野口　　努、八谷　理絵、法福実恵子、星　　菜穂、松井　和貴、松尾　竜児、渡辺　美香、黒川　麻衣、佐藤　千晶、鈴木由美子、藤野　里美、細田　彩花、宮脇　暁彦、矢野　直子、尹　　我瑛、島田　健太、高倉　小春、小松　和希、和田　　卓